

明治初期啓蒙的哲学思想の展開と変容

——「明治開化の本」展示会に寄せて——

飯田賢一

はじめに編集委員会より

昭和46年3月、『国立国会図書館蔵明治
期刊行図書目録 第1巻 哲学・宗教・歴史・
地理の部』が刊行された。これによっ
て、かねて要望の強かった明治期図書及び小
冊子類（「乙部図書」）数万点の利用が可能に
なったことなど、本目録刊行の意義はきわめ
て大きい。（解説が当館月報 No. 102, 1969.9
にある。）

編集委員会は、さきで開催された記念展示
会「明治開化の本」とあわせて、本誌上にお
いてもこの刊行を記念するため、古くからの
当館利用者で、明治期文献に詳しい飯田賢一
氏に、本目録をめぐる研究の一端をお寄せく
ださるようお願いした。目録の価値は目録自

体によって語らしめよとはよくいわれる言葉
であるが、いたゞいた原稿は、当初編集委員
会の期待した書誌的研究はむしろ背後にふま
えての、明治期哲学文献を駆使したユニーク
な学術論文であった。

本誌の性格上、本論文の掲載にはあるいは
他により適切な場があるかもしれない。しか
し、論文末尾に筆者が感懐をこめて記された
ように、旧上野図書館で明治期文献を渉猟さ
れた日々を追想しつつ筆をすゝめられたこの
ような労作こそ、本誌をかざるのにふさわし
いのではあるまいか。

なお『明治期刊行図書目録 第2巻 社会
科学の部』は、昭和47年4月頃刊行の予定で
ある。

目次

1	はじめに……………11	——東京大学における哲学の講義
	——問題の提起	
2	啓蒙的哲学思想の展開……………14	5 カント哲学の若干の紹介書…21
		——民間学者による哲学の研究
3	カント哲学移植の初期(1)…16	6 おわりに……………29
	——西周のカント解釈	——世界のなかの《日本》研究
4	カント哲学移植の初期(2)…18	

1 はじめに——問題の提起——

現代は情報化時代といわれる。ものそのものの価値よりも、情報の価値が大きな意味をもつ社会である。しかし、じつは情報化社会の前提である産業革命以来の工業社会において、情報（data, intelligence, knowledge 総じて information）のもつ社会的意義は、世界的にすでに十分に思索されていた。いや、ようやく工業化社会にはいろいろとする明治の文明開化期に、いち早く情報のほんとうの意味を見抜いた人がいる。ほかでもなく福沢諭吉。

「語にいわく、《智きわまりて勇生ず》と。余をもってこの語を解すれば、智と

は必ずしも「事物の理を考へて工夫する」の義のみにあらず、^{ひろく}「聞見を博くして事物の有様を知る」という意味にも取るべし。すなわち英語にて言えばインフォメーションの義に解して可ならん。」——かれの明治12年(1879)の著作**民情一新**は、西洋諸国の文明開化の基礎を、なによりも「その人民交通の便」にあると捉え、ことに1800年代の「発明工夫」である「蒸気船・蒸気車・電信・印刷・郵便」の進歩こそが、「社会の心情を變動するの利器」であり、「人間社会を顛覆するの一挙動」であると指摘する。かれによれば「智きわまりて勇生ず」というよりも、「聞見博くして勇生ず」である。「しこうして今、人の聞見を博くするがためにもっとも有力にして、その働きのもっとも広大なるものは、印刷と郵便の右に出ずるものあるべからず。」

だから、福沢はこうもいっている。わが国においても「今後もし国中縦横に鉄道を敷き、人民もしだいに郵便・電信の用法に慣れて、心身活動の大切にしてその機能の大なるを知るに至らば、わが社会の形勢はたして一変すべきは疑いを容れず。」と。

社会発展の基礎にコミュニケーション手段の発達(人民交通の便)と、それを駆使する人間の知力を据え、しかもそのコミュニケーション手段の発達の原動力に「蒸気の働き」を位置づけたこと、これが**民情一新**における論吉の発想の特徴である。⁽¹⁾

さて、ここでもう一つ論吉の文明論をみとみることにしよう。いわく「ワットが蒸気機関を発明し、アダム・スミスが経済論を首唱したるも、黙居、独坐、一旦豁然として悟道したるに非ず、積年有形の理学を研究して、其功績漸く事実に顕はれたるものなり。達磨大師をして面壁90年ならしむとも、蒸気電信の発明はある可らず。」——これは**文明論之概略**(明治7年)の一節である。

このように、人間の知性や思想の領域のことがらを、つねに実際の技術や科学に関することがら、つまり実学と結びつけて思索し、相互に関連づけながら、しかもそこに人間の知力の大きさを強調し、「人民の独立」を唱えたところに、明治初年の文明開化期における啓蒙思想の一つの大きな特徴がある。

近代哲学の父、カントは「汝自身の知性を使用する勇氣をもて!」というのが啓蒙(Aufklärung)の標語である」と言つてのけたが、上記のような文明開化期の啓蒙思想は、18世紀のヨーロッパ市民社会に成立した概念であり、一つの思想運動である「啓蒙」と、同一線上にあると、私は考える。「知は力なり」の言葉で知られるイギリスのフランシス・ベーコンから大きな影響をうけて **Encyclopédie** (百科全書)(1751~80年)を編さんし、フランスの啓蒙思想運動を導いたデイドロやダランベールのねらいは、『^{アール・リベラル}学問・技術・工芸の合理的辞典』として、「各学問および各技術——文学のような自由芸術であれ、生産技術としての機械技術であれ——につ

いて、その土台たる一般的諸原理、およびその本体と実質をなす細目を明らかにすること」であった。「人間知識の順序と連関とをできるかぎり明示する」こと、「学問と技術とが相互に助け合うものであり、従ってそれらを結合する鎖がある」ことを、原理的に、しかも実際に即して提供することであった。⁽²⁾

わが明治初期における啓蒙思想運動の中心となった明六社の人びと、すなわち森有礼、加藤弘之、西周、福沢諭吉、西村茂樹、中村正直、津田真道、神田孝平、箕作秋坪等々の期するところは、「文学・技術・物理・事理等、凡ソ人ノ才能ヲ富マシ、品行ヲ進ムルニ要ナル事柄」いっさいを論じ、民衆の知力を増進し、将来への知見を得ることであった。明治7年(1874)3月に第1号が刊行された明六雑誌の閲覧者は、創刊号以来の巻首に「明治甲戌2月、明六同社識」として、つぎの文があるのを知られよう。

「頃日吾儕蓋簪シ、或ハ事理ヲ論シ、或ハ異聞ヲ談シ、一ハ以テ学業ヲ研磨シ、一ハ以テ精神ヲ爽快ニス、其談論筆記スル所、積テ冊ヲ成スニ及ヒ、之ヲ鏤行シ、以テ同好ノ士ニ頒ツ、瑣々タル小冊子ナリト雖トモ、邦人ノ為ニ智識ヲ開クノ一助ト為ラハ幸甚。」

なお明六雑誌第1号の西村茂樹の文の巻末には、「本朝ニテ学術文芸ノ会社ヲ結ビシハ今日ヲ始メトス。而シテ社中ノ諸賢ハ皆天下ノ名士ナリ。人皆謂ハン、卓犖奇偉ノ論、千古不磨ノ説ハ必ラズ此会社ヨリ起ラント。何トゾ諸先生ノ卓識高論ヲ以テ、愚蒙ノ眼ヲ覚シ、天下ノ模範ヲ立テ識者ノ望ヲ曠ウセザランコトヲ是祈ル。」⁽³⁾とある。

もとよりルネサンス以来の市民社会への動きの伝統をもつヨーロッパの場合と、同列に論ずることはできないが、しかし右のような明六社の人びとの精神が、「汝自身の知性を使用する勇氣をもて！」と喝破したカントの啓蒙の標語と軌を一にすること、また学問・技術・工芸の原理的、総合的解明を、集団の共同作業によって遂行し、来るべき新しい社会への道を用意したフランスの啓蒙思想家たちの行き方と、決して無縁ではないこと、——これらのことは十分に言えるであろう。

ことに、西周および西村茂樹は、いっさいの学問・技術の基礎学としての哲学の基礎づけにおいて、西洋哲学思想の正しい受容と理解とを示し、その後のわが国哲学思想の発展のための準備を整えてくれている。少なくとも、将来の日本にも、世界史の流れと共通の地盤のうえに立った哲学思想がそこからおこるのである。諸々の用意、ないし可能性といったものを、提供してくれている。西の労作百学連環(明治3年・稿本)、百一新論(明治7年刊)、致知啓蒙(同)、『知説』(明六雑誌第14~25号、明治7年)および尚白箚記(明治15年起稿)などは、さしずめそのような歴史的意義を担う文献である。また西村の労作心学講義(明治18年刊)は、あらゆる学問から独立的で、かつ普遍的な「学」を志向した点で、まことにユニークな文献

である。この意味で、西や西村に代表される明治初期の啓蒙的哲学思想は、あたかもカントが、その純粋理性の批判（1781年）において唯一の純粋なる認識の批判（Kritik）を通じて、しかも科学の諸部門にわたる形式的統一性（原理）を目指したことと、一脈相通ずる学問的方法のうえに立っている。

そこでは、自然科学や技術の世界と切りはなして深遠な哲学を論ずるようなことは少しもない。かれらの学問思想の根底には「分析を通しての総合」という科学的かつ哲学的な方法があった。しかし残念なことに、これら啓蒙的哲学思想の特質、さらに明治初年の文明開化期に福沢諭吉らを先頭に展開された日本の啓蒙思想運動の成果は、やがて明治国家の発展期、帝国大学における講壇の職業哲学の確立期をむかえる明治30年代のころから、かえって急速に失なわれてゆく。

本稿では、このような明治初期啓蒙的哲学思想の変質の過程を、ことにカント哲学の移植をめぐる文献に即しつつ少しく明らかにし、世界史の流れのなかでの「日本」とは何かといった問題への、ささやかな反省を試みてみたいと思うのである。

- | | |
|--|--|
| (1) この『民情一新』からの引用は、中央公論社版『日本の名著・福沢諭吉』（昭和44年）による。 | 念の変遷』（昭和45年、武蔵野美術大学生活デザイン学科研究室）参照。 |
| (2) 桑原武夫訳編『百科全書』（岩波文庫）および飯田賢一編『わが国における技術概 | (3) 『明六雑誌』は、吉野作造編『明治文化全集・雑誌篇』（昭和3年、日本評論社）に収められている。 |

2 啓蒙的哲学思想の展開

西周（にし・あまね、1829～1894）を中心に、わが国における西洋哲学思想がいかに受容され、形成されたかについて、私はすでに明らかにしたことがあるので、かれの啓蒙的哲学思想の紹介は別稿にゆずり、ここではかれの百学連環（明治3年・稿本）のなかの言葉を2～3あげておこう。なお、百学連環とは Encyclopedia に対する西の訳語である。しかし本書は翻訳の書ではなく、きわめてユニークな独創の書である。

「ヒロソヒーの定義は philosophy is the science of sciences とて、諸学の上たる学なりと言へり。」

「凡そ事物に於て統轄の理といふものありて、必ずしも万事に就て統轄せざるべからず。故にヒロソヒーは諸学の統轄にして、国民の国王に於けるが如く、諸学皆ヒロソヒーに至りて一致の統轄に帰せざるべからず。」

「method 即ち方法は、何事にもあれ条理立ち順序ありて極りたる仕方なり。凡そ学に規模なく術に方法なきときは學術と稱しがたしとす。今此編を額して連環と呼なせしは、學術を種々の環に比し、是を二筋の糸を以て連ねたる如く、学と術と二つに區別し、始終連ね了解せんことを要す。」

西は「哲学」および「方法」についてのこのような一貫した認識のもとに、諸学

の本質をさぐり、それを分類し体系化することを、百学連環において試みたのである。かれのこの基本的立場は、晩年の著述尚白筭記（明治15年）にあっても、いささかも変わっていない。いわく「凡そ百科の學術に於ては、統一の觀ある事緊要たる可し。學術上に於て統一の觀立てば、人間の事業も緒に就き、社会の秩序も自ら定まるに至るべし。……故に統一の觀を立てるは哲學家の論究す可き所と為し、學術の精微を究むるは各科の學術を専攻する者に存する也。」

もろもろの學問を一つの學問（哲學）によって統一しつつ、しかもこれを分業的に推し進めてゆくという考え方は、封建社会には決してみることのできなかつた近代學問論の特質を示すものである。⁽²⁾

つぎに私は西村茂樹（にしむら・しげき、1828～1902）の心學講義（明治18年）にすすもう。ここで西村のいう「心學」とは mental philosophy の意味である。かれは心學講義でたしかに心理学を説こうとするのであるが、その「心理学」は広汎な内容を持ち、あらゆる學問の基礎學としての意味をおびている。かれはこう言っている。「心理学ニ付キテ余ガ目的トスル所ハ、獨立ノ心學ニシテ、道德ニモ依ラズ、成仏ニモ依ラズ、心一個ニテ學科ノ全キ体面ヲ具フル者ヲ云フナリ」と。

さらにかれは心學の學的意義をのべている。——「今日ノ法律學ト云ヒ、經濟學ト云ヒ、修身學ト云ヒ、政治學ト云フモ、心ノ學ヲ知ラザレバ、根ノナキ樹木ノ如ク、源ノナキ川流ノ如シ、就中近年學問ノ一科トナリシ教育學ノ如キモ、亦心學ヲ以テ必要ノ原質トスルニ至レリ。然レ共是等ハ皆形而上ノ學問ナレバ、心ヲ以テ其學ノ根本トスルハ誰ニモ知ラルル事ナレドモ、彼形而下ノ學問ナル數學、化學、格物學〔物理学〕、博物學、生器學〔生理学〕ノ類ノ如キモ亦皆何レモ心學ノ大意ヲ知ラザレバ、之ニ通達スル能ハザルコトナレリ。」

西村が心學を諸科學の基礎學に据えていることは明白である。このような獨立した基礎學としての心學の考え方は、かつて日本にも東洋にも存在しなかつた。「本邦ニハ昔ヨリ心ノ學問ニ付キテ論說ヲ立タル者アル事ヲ聞カズ。」「陸象山、王陽明ノ學ノ如キモ、其名ハ心學ト稱スレドモ、ヤハリ道德ヲ説ク為メニ心學ヲ用ヒタル者ニテ、道德ヲ離レテ心學ヲ説キタル者ニ非ザルナリ。」

かくて、かれは「第一ニハ其學科ヲ精密ニセンコトヲ求メ、第二ニハ何レノ一學科ニモ通用センコトヲ求ムル」目的で心學を樹立すること、そして「凡ソ立テテ一學科ト為シタル上ハ、道德學モ其學ダケノ全体ヲ具備セザルベカラズシテ、心學モ亦其學ダケノ全体ヲ具備セザルベカラズ、心學ナリトテ決シテ道德學ノ附屬トナルベキ者ニハ非ラザル」ことを、主張したのである。皮相的にみると心理学への偏重と受けとれなくもないが、學の根源を問うことにおいて、かれの哲學的思索は、すでに日本にも東洋にも、さらにヨーロッパにも通ずる共通の基盤に立つものであること⁽³⁾が、看取されるのである。

ベーコンにもヒュームにも、デカルトにもディドロにも、またカント・ヘーゲル・マルクスにも通ずる世界の哲学思想への大道を、着々と準備してくれたところに、西周や西村茂樹らに代表される明治初期啓蒙的哲学思想家たちの、大きな歴史的意義がある。

- (1) 飯田賢一「わが国における西洋哲学思想の形成」『白山哲学』第5号(昭和42年6月)および第6号(43年10月)参照。
(2) 『百学連環』は、大久保利謙編『西周全集』第1巻(昭和20年刊)に、『尚白簡記』

は三枝博音編『日本哲学全書』西洋哲学篇(昭和11年刊)などに収められている。
(3) 『心学講義』(和本)の評価は戸弘柯三(三枝博音)著『近代日本哲学史』(昭和10年ナウカ社)61ページ以下にくわしい。

3 カント哲学移植の初期(1)——西周のカント解釈——

つぎに私は少しく角度をかえて、カント哲学に即して、わが国での受容の経緯を明らかにしてみたい。

カントの哲学思想と日本との交渉のはじまりを確定することは、きわめて困難である。武藤長蔵や大塚三七雄の研究によると、カントの著作そのものならば、**人間学—Anthropologie—**(1799年版)を、C・E・ベディングハウスというドイツ商人が、文久3年(1863)に長崎へ持ち来たことが確められている。⁽¹⁾

しかし、これよりさき安政4年(1857)に蕃書調所教授手伝並となった西周および津田真道が、前者は文久2年(1862)に**哲学講義案**を、後者は文久元年(1861)に**性理論**をあらわし、ともに蘭学・英学を通じてヨーロッパの哲学思想を摂取していることを示している。麻生義輝の労作**日本近世哲学史**によれば、そのころすでに西は調所でLewesの**Biographical History of Philosophy**(1845)の講読を行っており、かかる哲学史の本をとおしてカント哲学に接していたことは、容易に察せられるのである。

西および津田は文久2年(1862)から3年間、幕府最初の留学生としてオランダのライデン大学に学ぶのであるが、留学中に西は**Cousin : Cours de l'histoire de la philosophie**や、**Hegel : Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie**など、仏・独語の哲学史書を購入した記録がある。西のおいに当る森鷗外が明治30年に**西周伝**をあらわしたとき、津田真道はそれに序文を寄せてオランダ留学中の西の学風を評し、「君はカント派の哲学を喜び云々」と書いている。西の訳述になるライデン大学教授フィセリング(S. Vissering)著**万国公法**(慶応4年刊)の西の「自序」には、カントの**永久平和論**からの影響が示されている。私たちは西周に、わが国におけるカント思想の最初の紹介者ないし研究者としての名を冠してまず差支えないのである。

かれの**百学連環**(明治3年・稿本)においては、カントはつぎのように扱われて

いる。

「German (日耳曼)に metaphysic (空理) School なるあり。此学の起りはKant (カント⁺¹⁷²⁴₋₁₈₀₄) Fichte(⁺¹⁷⁶²₋₁₈₁₄)Schelling(⁺¹⁷⁷⁵₋₁₈₅₄)Hegel(⁺¹⁷⁷⁰₋₁₈₃₁)等、最初より次第にその門弟にて4人あり、此カント以前の学者は殆ど神理に近きものにて曖昧たるものなりしが、カントに至りて異表の論説に及べり。即ちその説に Transzendental(最上)reinen(純粹) Vernunft(智)とて、人心たるものは元来純粹なるものにて他の物あるにあらず、心は time(時) & space(処)との考へに入るものにて、万事時と処に依て生ずるものなりと言へり。subjective(此観) objective(彼観)なるものは即ちカントの発明に依るところなり。」

また欄外の注記につきのことが書かれている。

「心は時と処とに入りて生ずるものなり。最も理解を要すへし。」

素直に原典の意味を受けとり、誰にでもわかるように表現しようとしている西の学問態度が推察される。わけても「時」と「処」のごとき、たとえば理學鉤玄(明治19年)の著者中江兆民が、それぞれ「永劫」および「宇宙」の語をもって理解しているのにくらべると、はるかにカントの示す形式(Form)の真意をとらえている。

「感(feeling)は知の基にあらず唯なにとなく心に触るるこれを感じといふ。」

「リーゾン即ち智は性の智にして、自然の知の深くなりたるこれを智となす。譬へば子たるものの父たるを知るは知なり。その父の恩あるを知りてこれに報じて父を養ふは子の智なり。」

連環の別の個所では上記のようなすぐれた概念規定を行なっている。今日ならさしずめ感性と知性と理性の区別といったところであろうか。

つぎに明六雑誌第38~42号(明治8年)に載った西の『人世三宝説』(健康・智識・富有の三つが最大福祉を達成するための基本であるとした一種の道德論)、および生性発蘊(明治6年稿)に、カントの紹介がある。ここでは「韓図(カント)」の「絶妙純然靈智(トランスセンデンタルライネンフェルニェンフト)ノ説」あるいは「卓絶極微純靈智(タランスセンデンタルライネンヘルニェンフト)」といった表現がみえる。後者には**純粹理性の批判**における認識論の説明が付されている。

—「爰ニ靈智ト訳スルハ理性ト同ジ、唯独語少シク差異アルヲ覚ユ、故ニ靈智ト訳ス。」^{オモヘフ}「以謂ク人ノ性上ニ固有ノ靈智アルハ、猶家室ノ窓牖アリテ明ヲ受ルガ如シ、靈智ノ区シテ以テ別スルハ、猶窓格ノ区シテ以テ別スルガ如シ、諸影ノ牖ヲ透シテ映ズルハ、上下左右ノ窓格ニ随ハザルナシ、故ニ感覺ノ我が心ニ映ズルモ、亦此固有ノ靈智ノ觀念ニ従ハザル莫シト。今其一ツヲ挙グレバ、靈智ノ窓格^{スペース}ハ宇観ト^{ダイム}宙観(宇観ハ上下四傍、宙観ハ古今往来、原語ハ広サ及ビ時ノ字ナリ)トノ如シ。人ノ靈智上、^{アプリアリ}先天(先天後天ハ「ア・プリアリ」及ビ「ア・ポステリオリ」ヲ訳ス、前ハ自

然ニシテ存スルヲ謂ヒ、後者ハ経験ニ依テ来ルヲ謂フ。漢字ト正ニ相符ス）ヨリシテ、上下四方ト古今往来トノ觀ヲ存ス。故ニ後天^{フボスアリオリ}ニ於テ、万有感覺ヨリシテ我が心ニ映ズル時ハ、我レ之ヲ觀テ時ト処トニ於テ之ヲ判ズ。譬ヘバ、今一匹ノ馬ヲ見ル時ハ、我レ之ヲ見ル瞬間ヨリ以前既ニ此馬ノ在リタルト、又其瞬間ヨリ以後必ズ在ルベキトヲ知ル。是レ宙觀ニ落テ、時ニ就テ考フル者ナリ。又同時ニ此馬ノ形狀如何、其居処如何、足ヲ運ビ体ヲ動カス如何ヲ知ル。是レ宇觀ニ落テ、処ニ就テ考フル者ナリ。カント此說ヲ述ベ著ハンテ靈智ノ分類表アリ。」

以上が西周のカント解釈のほぼ全貌である。英独仏各国の哲学史の文献を通じて、かれはカントの哲学を理解したのであろう。哲学用語（訳語）の明晰性は**百学連環**のころよりも後のほうが、やや劣るかの感もあるが、空間・時間と範疇^{カテゴリー}の形式を、こころの窓格(まど)の比喩を使って理解しようとした試みは、すぐれている。reasonにあてたかれの訳語「理性」と、ドイツ語の Vernunft とは同じだが、「少シク差異アルヲ覺ユ」る故に「靈智^{ヘルムニツフト}」という言葉を選んだ、とことわり書きをする配慮、しかも日本語では原意をつかみにくいと思われる用語（訳語）には、かならず原語のルビを付した周到さ、これらのことを読みとれば、私たちはかれが今日ならさしずめ「先験的純粹理性」と書くところを「絶妙純然靈智^{トランスセンデントアルライネンフエグムニツフト}」と表現したからといって、かれが決して、哲学の深遠化・神秘化を意図したものでないことは、了解されるであろう。

西の哲学思想の核心は、その学問方法論において、論理的厳密性、いいかえれば概念による思惟の方法を明確に遂行することを強調し、同時に「経験」を重んじて、たんなる思弁あるいは深遠化におちいることを深くいましめたことにある。かれの思想がすぐれて啓蒙的であるのもそのためである。⁽²⁾

(1) 武藤長蔵「我国に最も早く伝へられたりと思はるるカントの著述」(『長崎高商研究館年報』第5年第1冊)、大塚三七雄「明治前期独逸哲学輸入史」(『哲学論叢』第6輯)など参照。

(2) 飯田「わが国における西洋哲学思想の形成(Ⅱ)啓蒙的哲学思想の生成——西周の哲学思想について」(『白山哲学』第6号)参照。

4 カント哲学移植の初期(2)——東京大学における哲学の講義——

前述のように西周は、わが国におけるカント哲学の最初の紹介者・研究者であった。しかし、カント哲学を直接に日本に移植した学者とは、かならずしもいえないであろう。その端緒は、やはり明治10年(1877)創立の東京大学における外人教師の哲学講義に求めるのが妥当であろう。

東京大学での最初の哲学講義担任は、麻生義輝著**日本近世哲学史**によれば、英人エドワード・サイルである。ただし、当初は哲学科はあっても、学課目の名称は哲学で

はなく「道義学」であった。つぎが米人フェローサ、つぎが英人クーパーで、講義は英文により、ことにクーパーはカント演習をも行なったという。文学部哲学科に1期生として入学した井上哲次郎の回想的著述「余の幼時より今日迄の概観」(教育昭和10年10月号)によると、当時使用した教科書は、「哲学では、英訳のシュエグレルの哲学史、リュキスの哲学史、スペンサーの哲学原理・倫理学・社会学等、バインの心理学及び倫理学、ミルの論理学及びExamination of Sir William Hamiltons Philosophyなど」であった。

はじめてドイツ人哲学教師としてブッセが着任したのは、明治20年(1887)である。伊藤博文が憲法草案の起草のために渡独して、招請の機縁をつくったといわれるこのブッセについては、哲学会雑誌第3冊第27号(明治22年5月)の『日本哲学ノ現況』(筆者は谷本富)という雑報記事が、その来日にさいして「文科大学哲学専任教授独逸人ブッセ氏はロッツェ学派の人にして、兼ねてカント哲学に通曉せる様なれば、他日独逸哲学勃興の運に向ふべきか」と、期待を寄せている。そして、のちに東大哲学科の主任教授となった伊藤吉之助は、その『哲学会史料』(哲学雑誌第300号)のなかで、ブッセを「哲学の歴史的研究を奨励し、……哲学研究に一転機を与へた」と讃えているのであるが、かれが任をおえて日本を去った明治26年当時の哲学雑誌第8巻第80号をみると、その雑報欄に、つぎのようなしんらつな外国雑誌のブッセ評が訳載されている。

「前文科大学教師ブッセ氏曾て我国大学に在りて為せる哲学概論の講義録を英国マインド雑誌に贈りたるものと見え、新刊の同雑誌上之に対する評言を見る。曰く、≪此講義は独人が英語を以て日本学生に授けたるものにして、ロッツェの説を奴隸的に繰返したるのみ、間々文章をも其のまま剽窃せる所あり。著者の英語亦頗る奇なり。されども東京の大学に於て哲学が如何に教授され居るかを見んが為めには斯の講義亦幾分の興味なきに非ず≫」

この記述から推すと、明治20年代中期まで、東京大学におけるカント哲学は、むしろ萎靡不振の状況であったのではあるまいか。当時まで東京大学の哲学研究の中心は、周知のようにダーウィン、スペンサー、ヘッケル流の進化論的哲学思想で、ドイツ哲学より英米哲学が主流を占めていたのである。

ブッセに代って新たに外人哲学教師として着任したのは、ドイツ人ケーベルである。かれの来日は明治26年(1893)であるが、これよりさき明治23年に井上哲次郎がドイツ留学をおえて東京大学=帝国大学文科大学の教授となり、ドイツ哲学、ことにカントとショーペンハウエルを講じ、いっぽう中島力造がイギリス新カント派の思想を紹介して、ようやく東京大学でのドイツ哲学研究は勃興の気運に向い。さらにケーベルの着任がそれに拍車をかけた。明治27~8年の日清戦争を契機とする国内情勢の変化は、在来の実証主義・経験主義的思潮を、急速に国家主義的思潮に

向わせる要因となり、これに対応するかたちで帝国大学哲学科に拠る人びとも、急速にドイツ哲学へと駆り立てられていったのである。

これらから後の経過と、ドイツ哲学に対するわが国哲学者たちの受けとり方については、三枝博音著日本に於ける哲学的觀念論の発達史⁽¹⁾(初版昭和9年、改訂新版昭和44年)が正当な批判を行なって、余すところがない。ここでは私は、カント哲学移植の初期に属する著作として、のちにわが国哲学界の大御所となった井上哲次郎が、カントをどのように受けとめていたかを紹介するにとどめたい。

井上哲次郎が明治16年(1883)に公刊した著述に倫理新説がある。かれの東京大学卒業の翌年、明治14年に同大学で講演したもので、その題字には「吐露卑見、以問千古」と気負って書かれているが、じっさいこの書は当時の青年が随喜渴仰したほどの野心作といわれている。その論旨は、現象の背後には「萬有成立」(Universal Existence)なるものがあり、そこに「倫理の大本」が存するというにある。そして、この「萬有成立」とは、井上にしたがえば「人力ノ管外ニアリ」[「実ニ人智ヲ以テ測リ知ルベカラザルヲ以テ我之ヲ畏レ、之ヲ神トシ、之ヲ敬シ、之ヲ拝ス」という存在である。かれはこの「萬有成立」につけてカントを借用する。いわく、「抑萬有成立ヲ信仰スルハ、余一人ニ非ズ。時ノ古今ヲ問ハズ、洋ノ東西ヲ論ズ、苟モ公平ノ眼ヲ以テ宇宙ノ解釈ヲ求メシ者ハ、必ズ萬有成立ヲ奉信セリ。唯其名ヲ異ニスルノミ。孔丘ノ徒ハ之ヲ太極ト曰ヒ、老聃ハ之ヲ無名ト云ヒ。釈迦ハ之ヲ如来藏ト云ヒ、ゼノフハニース氏ハ泰一(ワオン)ト曰ヒ、ヘラクリトス氏ハ之ヲ転化(ビコミング)ト曰ヒ、アナキサゴラス氏ハ之ヲ萬有叡智(ヌース)ト曰ヒ、韓図ハ之ヲ実体(デングアンジヒ)ト曰ヒ、スピノザ氏ハ之ヲ萬有本体(サブスタンス)ト曰ヒ、セルリング氏ハ之ヲ絶対(アブソリュート)ト曰ヒ、スペンセル氏ハ之ヲ不可知的ト曰ヒ、……^{〜グル}歇傑爾、コント、リュウキスノ諸氏ハ直チニ此ノ現象世界ヲ以テ萬有成立トス。……是レニ由リテ之ヲ觀レバ、諸先輩ノ説ニ於テ小差異ハアレドモ、之ヲ要スルニ、皆人類ノ外ニ一種特別ノ萬有成立アル事ヲ信ズルナリ。唯之ヲ信ゼザル者ハ中等以下ノ学士ナリ。」

まことにおそるべき博引傍証である。カントの「もの自体」Ding an sichが莊周の無無、列子の疑独などと同列にならべられ、いずれも「人力ノ管内」にはிரがたい井上の「萬有成立」を根拠づける手段に使われるのである。読者はここに、博識ではあっても決して東洋思想と西洋思想の相異を混同せず、それらの本質の分析を通じての総合を目ざし、哲学的概念の正しい把握につとめようとした西周らと、井上哲次郎との学問的方法の根本的なちがいに気づかれるであろう。そこには、哲学の現実から遊離した深遠化、神秘化の傾向が、はっきりとあらわれている。

井上は、明治17年から23年にかけてのドイツ留学のさい、ハイデルベルク大学でクルノー・フイッシャーからカント哲学の講義をうけ、イエナ大学ではオットー・

リープマンらに学んでいるが、帰国後格別カントを論じた労作を残していない。明治16年に公刊された文献に西洋哲学講義（有賀長雄との共著）があるが、カントを扱ってはいない。かれはわが国における哲学思想の普及者として大きな役割を担った人であるが、かれの本領はむしろ東洋哲学史の叙述（たとえば日本朱子学派之哲学明治38年、日本陽明学派之哲学明治33年）にあったように思われる。しかし、本来合理的精神の結実であるべきカントやヘーゲルの哲学が、井上という指導者を通じて深遠のベールをかぶり、あらゆる科学の基礎学としてよりも、むしろ宗教的な心情のもとに、日本の思想的土壌に接種されたことを、私はその後のわが国思想文化の発展のために、まことに残念に思う。

（1）筆者の編集になる新版『日本に於ける哲学的観念論の発達史』（昭和44年、清水弘文堂書房）には、初版当時の補遺のほか、著者（三枝博音）の「私の学問・思想の遍歴」が収められ、西田幾多郎や田辺元によるカント解釈の批判にいたるまで、わかりやすく理解できるようになっている。

5 カント哲学の若干の紹介書——民間学者による哲学の研究——

ドイツ人哲学教師ケーベルの帝国大学への赴任によって、ドイツ哲学が精力的に移植されるまでのわが国のカント哲学の研究は、主として民間学者にちの手で開拓されてきた。竹越與三郎著独逸哲学英華（明治17年）、有賀長雄訳近世哲学（明治17年）、中江兆民の著述理学鉤玄および理学沿革史（明治19年）、三宅雄二郎著哲学涓滴（明治22年）ならびに清野勉著標註・韓図純理批判解説（明治29年）などは、いずれもカントの学説を紹介し、カント哲学移植のうえで大きな役割をはたした文献である。

まず竹越の独逸哲学英華（明治17年）をみてみよう。著者はその凡例のなかで「此書ハ単ニ独逸哲学中ノ英ヲ咀ミ華ヲ含ムヲ以テ目途トシ、初ヨリ主義ノ如何ヲ問ハザレバ……」と語っている。この書は「韓図（カント）」「低非フィヒテ」「勢麗非（シェリング）」「歇傑児（ヘーゲル）」など、文字どおりドイツ哲学の「英華」ともいふべき哲学者たちの思想体系の叙述である。竹越は本書を「独逸国キール大学校哲学博士チャーリ・ボース氏著思考哲学相伝史」を中心とし、あわせて「ヘッジ氏著日耳曼芸文誌、テンネマン氏著哲学史綱要、レウキス氏著哲学紀伝史」を参考として著わしたとのべている。ことにカントにはもっとも多くの紙数をついやしているが、⁽¹⁾もろもろの哲学説を一つのドイツ・イデアリスムスの体系のなかに位置づけ、その発展の過程に即して理解することにつとめているところに、本書のすぐれた特徴を示している。竹越は、本書の冒頭でカントを「18世紀布刺多（プラトーン）ノ聖」と賞揚し、ついでカントをその根幹とするドイツ・イデアリスムスの発展過程を、つぎのようにのべている。

「思フニ日耳曼ノ哲学が其一般文学ノ上ニ起セルガ如キ非常強大ノ波動ハ、古来歐洲哲学ノ歴史ニ於テ未ダ曾テ遭遇セザル所ニシテ、夫ノ批判哲学（クリチカルヒロソヒー）及ビ超絶哲学（トランスセンデンタルヒロソヒー）ノ如キハ実ニ此際ニ生ゼリ。抑モ批評哲学ハ韓図子ニ始マリテ韓図子ニ終リ、遮詮的ニシテ破壊ノ性アリ。超絶哲学ハ批評哲学ヨリ流出シ、表詮的ニシテ整正ノ質アリ。韓図子が古来ノ伝説ノ誤謬ヲ批判説破シテ途ヲ關クニ乗ジ、観念学家タル非低（フィヒテ）子哲学進行ノ主観的ノ道ヲ求メ、天地上帝説ヲ保持セル勢麗（セーリンヒ）子其客観的ノ路ヲ執リ、風雲大イニ哲学界ニ起ツテ英雄類リニ講理境ニ際会シ、邪呼尾（ジャコビ）・包瀑図（ハアバート）・須意虞礼児（シュグレル）ノ徒其ノ間ニ馳驅シ、遂ニ万有靈智ノ賢歇傑児（ヘーゲル）子ニ至リ一箇広延ノ方式中ニ天下各派ノ哲学ヲ包容スルノ法ヲ樹ツルニ及ビ、此ニ哲学其ノ大成ノ功ヲ竣ルヲ告ゲンナリ。此時ニ方ツテヤ独國ノ諸子洪然トシテ起リ、百家内ニ相争フト雖モ其ノ執ル所ハ皆ナ此二派ノ内ニアルヲ以テ、旗幟精明万国ニ誇輝シ、以テ所謂ノ独逸哲学ナルモノヲ成セリ。而シテ二派ノ内超絶派ハ亦タ実ニ其ノ根基ヲ批評派ニ有セルヲ以テ、韓図子ノ独逸哲学ニ於ケルハ猶ホ神子ノ創世紀ニ於ケルガ如シ。然ラバ則チ此書ヲ始ムルニ円蟻郵留〔Inmanuel =インマヌエル、すなわちカントの前名まえ……引用者〕ノ字ヲ以テスルハ理ノ当サニ容ル所ナルベシ。」

ここにはドイツ・イデアリスムスの発展およびその過程が正当に叙述されている。いやそれのみでなく、カントを「根基」とするもろもろの哲学体系が、さらに一つの統一的なドイツ・イデアリスムスを構成していることが、しっかり把握されている。文中に「表詮」と「遮詮」という用語が出てくる。これは著者が因明の語からとった邦訳の一つの試みで、それぞれ「肯定」および「否定」を意味している。しかし著者は、このような新しい、ないし独自の概念に対しては、別に「訳字釈義」を付して解説を行ない、また本文の上欄にドイツの哲学者たちの表明した語句に当る東洋の思想家たちの言葉を添えるなど、ドイツ哲学最初の紹介者としての細心の注意をはらっている。たとえば、上記二つの用語に関しては、つぎの説明がある。

表詮＝従来正説或ハ肯定ト訳セルモノニシテ、其ノ意ノ是トスル所ヲ表ハンテ之ヲ詮カニスルノ法ナリ、英語ノ「アッフアメーション」

遮詮＝従来反説或ハ否定ト訳セルモノニシテ、其意ノ非トスル所ヲ表ハンテ之ヲ詮カニスルノ法ヲイフ。

さて、竹越は**独逸哲学英華**においてカントの学説を紹介するに当って、批判主義の歴史的意義を叙述することを忘れない。いったいドイツ・イデアリスムスの「根基」となったカントの「批評哲学」はどのように形成されたか。ヒュームからカントへの「方法問題」の移行の過程を、かれはつぎのように記している。

「禄子（禄苦—ロック—）ト飛子（飛字無—ヒウム—）ハ頻リニ批評的ニ一個人ノ代現ノ本原ヲ推鑿スルヲ勉メテ遂ニ之ヲ經驗ニ跡ネ得タリシガ、韓凶子出デテ再ビ所謂ル本原ナルモノノ本原ヲ推鑿シ、經驗ノ本原ヲ究ハムルヲ批評家ノ目途トナスニ至レリ。之ヲ以テ世称ス、韓子（韓凶—カント—）ノ批評哲学ハ二子ノ経練哲学ヨリ生ズト。然ルニ韓子ハ即チ曰ク、余ヲシテ独断ノ陷井ヲ脱シテ思考哲学ノ広漠ナル原野ニ出デシメシハ、則チ之レ墮尾土飛字無（ダビットヒウム）氏其人ナリ。然レドモ広漠ナル原野ニ出デテ草木榛々鹿豕狃々タルモノヲ清ムルニ方ツテ、飛子ハ余ニ於テ何ニカアラント知ルベシ。……抑モ子ノ説ニヨレバ原因結果トハ吾人が其ノ顕象ヲ見テ心ヨリ之ニ附加スル所ノ一総念ナリ。此総念ハ經驗ヨリ拔萃スルモノニ非ズ、其レ已ニ然ルヲ以テ必ズシモ之ヲ以テ正当ナルモノトナス可ラズト。然ルニ飛子ハ則チ以テ經驗ヨリ生ズルモノトナス。是ヨリ二子吾ノ道ヲ開ケリ。然レドモ吾人ノ思フ所ヲ以テスレバ、經驗若シ此総念ヲ生ズルモノナラバ偶然ノモノニシテ、普通ト必然トヲ欠クモノト云フベシ。是レ經驗ハ終始相同ジキモノニ非ズシテ時ニ自ラ相徑庭スルアルヲ以テナリ。然ラバ則チ総念ハ自己ノチ思想ヨリ生ズルモノナリトイフヲ以テ正当ナリトナスベキ乎。故ニ韓子ハ猶ホ一歩ヲ進メテ曰ク、世ニ吾ガ認識ハ外物ニ従ヒテ自己ヲ規制スルモノナリトナスアリ。然レドモモノ論ハ到底成功スルコト能ハザル可シ。之ニ代フルニ外物ハ認識ニ規制サルモノトセバ……」

かくて、対象としての現象＝「顕象」こそ認識、つまり「已ニ然ル」ところの主観のアプリオリな原理に規制される、というカントにおける思考方法の「コペルニクスの転回」がのべられ、さらにすすんで「韓子哲学概見」ならびに「判断力論」が叙述される。もって、竹越の労作は、近代のドイツ哲学についてまとまった知識がまだまったく提供されていなかった時代に、ドイツ・イデアリスムスやカントの「批評哲学」について、その哲学思想上の意義をきわめて正当に紹介したものと評価することができよう。

竹越与三郎（たけごし・よさぶろう、1865～1950）は、新日本史、日本経済史などの著述で知られる明治・大正・昭和の民間史家であるが、慶応義塾卒業後、時事新報、国民新聞などの記者として活躍、日清戦争後は西園寺公望系の雑誌世界之日本の主筆となり、明治35年からは政界の人（政友会代議士、のち貴族院議員）となっている。かれの生涯と青年期の哲学史の労作といかように結びつくか、本稿の課題の外にあるが、出発点のかれは啓蒙的哲学思想家でもあったことは、独逸哲学英華の一書をもって立証することができる。

つぎに私は中江兆民の仕事にふれてみたい。明治19年（1886）に公刊されたかれの訳書理学沿革史（原著は A. Fouillée : *Histoire de la Philosophie*, 1875）および一種の哲学概論書である理学鉤玄のなかで、かれはカントの学説を紹介してい

る。すでにフィロソフィーの訳語として「哲学」が一般化しつつあったにもかかわらず、中江はこれに「理学」の語をあてている。そして、**理学鉤玄**では、カントの「意象説」すなわちイデアリズムの「法式」が、「**観察ノ智ノ検覈**（クリチック・ド・ラ・レーゾン・ピュール）」および「**実行ノ智ノ検覈**（クリチック・ド・ラ・レーゾン・プラチック）」の二つの批判書に関連して考察され、「**感覚**（サンシビリティー）」「**推理**（アンタンドマン）」「**良智**（レーゾン）」「**覚悟**（アンチュイション）」「**原理想**（メタフィジック）」「**宇宙**（エスパス）」「**永劫**（エタン）」「**事後**（ポステリオー）ノ識」「**事前**（プリオー）ノ識」および「**性**（カテゴリー）」等々の訳語を駆使して説明されている。

中江兆民（なかえ・ちょうみん、1847～1901）は、明治初年における自由民権運動の発祥地、土佐に生まれ、後藤象二郎や板垣退助の推挙をうけて明治4年（1871）政府留学生としてフランスに留学し、3年間主として哲学・史学・文学を修め、帰国後外国語学校長となり、やがて私塾を開いてフランスの自由思想の体系的教授を行ない、自由民権運動左派の理論的指導者となったのであった。明治の代表的唯物論者・無神論者としても知られている。しかし、上記のような訳語をもってしては、日本語を思考の道具としてカントのイデアリスムスを正しく理解させるには、まず困難であつたろうと思われる。

兆民の有名な遺稿**一年有半**（明治34年刊）には、「日本の哲学」に対しての鋭い批評がなされている。いわく「我日本古より今に至る迄哲学無し。……近日は加藤某〔加藤弘之〕、井上某〔井上哲次郎〕、自ら標榜して哲學家と爲し、世人も亦或は之を許すと雖も、其実は己れが学習せし所の泰西某々の論説を其儘に輸入し、所謂崑崙に箇の棗を呑めるもの、哲學者と稱するものに足らず。夫れ哲学の効未だ必ずしも人耳目に較著なるものに非ず、即ち貿易の順逆、金融の緩慢、工商業の振不振等、哲学に於て何の関係無きに似たるも、抑も国に哲学無き、恰も床の間に懸物無きが如く、其国の品位を劣にするは免る可らず、カントやデカルトや実に独仏の誇也、二国床の間の懸物也、二国人民の品位に於て自ら関係無きを得ず、是れ閑是非にして閑是非に非ず、哲学無き人民は、何事を爲すも深遠の意無くして浅薄を免れず。」

兆民は青年に語りかけて、「諸君の志を伸べんと要せば政治を措て之を哲学に求めよ、蓋し哲学を以て、政治を打破する是なり」といい、また「今後に要する所は、豪傑の偉人よりも哲学的偉人を得るに在り」ともいっている。一年有半および**続一年有半**でも知られるように、兆民はみずから思索することをした、まれにみる明治の思想家であった。この両書自体が日本における真の人民の哲学の確立をうたえているようでもある。しかし、三枝博音がその著**日本の唯物論者**（昭和31年刊）において指摘するように、フランス的教養の豊かであった兆民にしても「18世紀のフランスの唯物論者のディドロによって理解されていたような哲学、すなわち、人間

の生産活動や技術や、それらを通じて知られる自然界、こういったものと人間の知性とをつねに照合せつつ、思索するというやり方の哲学の性格が、ナカエニスム〔兆民の哲学思想〕のなかに出ているかということ、そうはできていない。むしろ、かなり古風なところがある。」

東洋のルソーと称された兆民ではあったが、ヨーロッパの啓蒙的哲学思想のよき紹介者であるには、かれの東洋的な教養が、それをさまたげたとも言えようか。

つぎに私は三宅雄二郎(雪嶺)の著述**哲学涓滴**(明治22年刊)にすすむことにしよう。この書はカント哲学、いや一般にドイツ哲学の研究を隆盛にみちびく導火線ともなった文献である。「泰西哲学の始祖ターレスは……水を以て宇宙の原理と為せりと、果して然らば幾くは余の陳述する所之が涓滴たらんことを」といって、三宅はこの書を**哲学涓滴**と名づけ、第1部緒論、第2部独断法の哲学、第3部懐疑法の哲学、第4部批判法の哲学、の4部に分って、ドイツ・イデアリスムスの形成を論ずる。カントはいうまでもなく第4部において取扱われる⁽²⁾。著者は、独断法の哲学のなかに唯理論と経験論の両学説を配し、これに対してヒュームの哲学を懐疑法の哲学に置き、これを受けるにカントの批判法をもってしている。叙述の方法はきわめて弁証法的である。

三宅はのちに**我觀小景**(明治25年)のなかで、「嘗て**哲学涓滴**といふ一冊子を著すも、以て少しく諸家の意想を表明し、評騭せんとするに在りて、務めて私見を圓ふることを避けたり」とのべているが、**涓滴**ではみずからシュヴェグラーとクノー・フィッシャーによっていることを記している。ことに **Schwegler: Geschichte der Philosophie** のカントおよびヘーゲルの章からは、構成・内容ともに大きな影響をうけ、両学説の組織的な紹介に力が注がれている。もっとも、叙述をシュヴェグラーによったとはいえ、「論評に係る部分は総べて著者自身の文辞」であると、第1部緒論にはのべられており、この「部分」がドイツ哲学不振の当時であって、きわめて啓発的な意義をもっている。いいかえれば、読者たちをして、カント哲学へ、ドイツ哲学へと向わせずにはいないような雰囲気をも、この書はかもし出しているのである。

哲学涓滴は、カントの**純粋理性の批判**以下の学説を、つぎのように論述している。

「カントは忍耐に富み、造構に長じ、一事一件乱雑に放却するを欲せず、議論必ず秩序を有し、学理必ず体系を成すが為め、誹謗を好む読者をして叙述の拙劣、文字の晦渋を嫌厭せざらしむるが如し。哲学の分類を定むるに、心理の法則に因らんとし、心意に認識、意志、感情あるより認識自らの道理に関するを**純粋道理**と為し、意志の道理に関するを**実践道理**とし、苦楽等の感情の道理に関するを**断定**とし、従て批判の目的よりして、**純粋道理批判**、**実践道理批判**、**断定批判**の3大書を著述す

ることとなれり。此3大書が詞辞の快妙なる莫く、弁論の詭幻なる莫く、而して靡然として一世を動揺し、傲慢なる英仏の人民をして、独国の哲学の尊重すべきを知らしめたるは、哲理欠乏の好運に際会せるに由ると云ふものの、亦絶世の卓見能く思想発達の順序を看破し得たるに依らざんや。」

三宅のカント哲学の紹介は、明解であり、客観性をおびていて好感がもてる。さらに上記**純粹道理批判**について、つぎのように論述されている。

「**純粹道理批判**は純粹道理にて抱有する所を総括して論ずる者にして、換言すれば吾人が先天にて弁知する所を充分に究察するものと認めらるるなり。吾人の知覚するは如何なる作用に依るかは、即ち最初の問道にして、カントは感性と悟性との2性よりして説明を始めたり。先ず第1に感性よりして先天に抱有する所は何等の者なるを問ひ、第2に悟性よりして先天に抱有する所は何等の者なるかを尋ね、第1をば超絶感覺学に、第2をば超絶論理学に弁ぜり。冒頭を概すれば、感性と悟性とを以て認識の要素とし、感性の爲め感覺を得て事物を感受し、悟性の爲め総念を作りて、事物を思惟すとし、感覺を踏まざる総念は空虚にして、総念に合せざる感覺は粉乱なりと定むるなり。要するに感覺と総念とを目して吾人の通曉力を発出すると断ずるのみ。偕て是より前の2問に応答することとなるなり。」

カント哲学のもろもろの概念を、その抽象性において理解し、客観的にとらえようとするかぎりにおいて、三宅の論述はきわめてすぐれている。しかし、かれはまた、比喩的なもの、形象的なことがらを例証に出して、これを駆使し、カントの抽象的な理論を理解しようとする努力をも行なっている。たとえば、カントの先験的論理学のなかの先験的分析論と先験的弁証論との関係は、「超絶分解法に於て説明したる所は、常に太平を歌ふべき島国なり。山川の形状歴歴として指定すべし。但だ海上を望めば雲霧漠々、山嶽の如きもの、島嶼の如きもの、処々に頭はれ、船舶を造り、順風に乗じて進行すれば、水烟奔騰し、波濤激衝するあるのみ。斯く人目を迷はすは、理性の然らしむる所なり。超絶弁証法にては、先ず悟性と理性とを區別し、悟性に範疇ある如く、理性に観念ありて、悟性が範疇より単則を生出する如く、理性は観念より原理を生出すとするなり。理性の第一義とする所は、有碍に対して、無碍を発見するにあるが、実は人生の癖として、個々特別の事件に満足せず、悟性に種々にて統合し得たるより、更に進で究竟の大道理を覚知せんとするに基けるなり。之が爲め著大の虚偽を生ず。……」と記されている。三宅は理性における仮象（シャイン）の問題を比喩をもって説明しているのである。いっばんに事物を形象的にとらえようとする態度は、日本人の特性の一つではあるが、しかし純粹で抽象的なカントの哲学の概念を、その抽象性においてでなく、形象によって具体的にとらえようとする試みは、さけられるべきであろう。

三宅雪嶺（みやけ・せつれい、1860～1945）は、東京大学哲学科の出身で、井上

哲次郎の最も初期の教え子の一人である。明治21年(1888)井上円了らと政教社を設立し、当時の欧化主義の思想に反対して日本主義をとまえ、日本人は東洋独自の学問・芸術を發展させ、世界人類に貢献すべきことを主張して、多くの文明批評を書き、ながく論壇に活躍する。かれの哲学思想のあり方は、きわめて実践的である。しかし、その師井上哲次郎がかつて**倫理新説**(明治16年)において「萬有成立」なる概念をつくり出し、東の思想も西の思想もこれにぶちこみ、抽象でなく形象を通じて「独特」の哲学説を立て、むしろ哲学の深遠化を行なったように、三宅もまた、いっぽうではカント哲学の客観的な解説に力量を示しながら、その形象的思考のゆえに、抽象性をその本質とするヨーロッパ哲学を深遠のものにしてしまうおそれを蔵している。哲学涓滴の緒論に「近世の西洋哲学は寔に微妙の寰区に進入するの階梯にして、一段を後にし、一段を前にし、段々登上すれば、杳々たる層霄に達すること、猶ほ南海の怪物が茫洋として玄間を窮むる如くならんか」と三宅がのべているのは、その一端を示してはいないであろうか。哲学に対するこのような理解は、文明開化期の西周や福沢諭吉たちの啓蒙思想にはみられないものであった。

カントはその**論理学講義**において、「哲学的認識は、普通の理性使用が一般的なものを抽象性において認識することを試みはじめる処からはじまる。」(田辺重三訳)といっている。形象への階梯によらずに、抽象的に理性認識を開拓しようとするところから、哲学的思索がはじまるのである。カントはまた同書のなかで「哲学は、近世におけるその革新を、一つは自然のいっそう大いなる研究に、一つは数学と自然科学との結合に負っている。」とのべている。ドイツの市民社会の日ましに強大になりつつあった時代に、これと対応しておこったカントの批判書は、本来きわめて抽象的な理性認識の書である。しかし、決して難解な哲学書ではない。これを形而上学的に深遠無比の高踏の書としたのは、カント以後の(日本も含めて)講壇哲学者たちである。

こうした意味で、明治29年(1896)に公刊された清野勉の**劳作韓図純理批判解説**は、「直截にカントを読み、その真意を汲む点に於て」その後の日本の多くのカント学者たちよりも、はるかにすぐれている。清野はカントの原文をよく熟読し、**純粹理性の批判**の読者はどういう順序で読めばよいか、どの点を重要に取扱うべきであるかについて、ていねいに教えている。「サレバ余輩ハ純理批判ヲ繙閲セントスル読者ニ、次ノ如キ順序ニテ講読ラススム。冒頭先ヅ第15節ヲ繙キ、之レヲ第10節ト比較シテ研究シ、次ニ第19節、更ニ引キ戻シテ第16若クハ17、ソレヨリ直チニ18、20及ビ24ニ及ブベシ。24及25ノ下半ハ全体ノ立論ヲ読ミ畢ハル後、更ニ朔リテ之レヲ読下スベシ。読者若シ此順序ヲ追フテ純理批判ノ本文ヲ繙読スルニ於テハ、心力ヲ勞スルコト小ニシテ、韓図ガ立論ノ真味ニ通曉スル事却テ明晰ナルモノアラン」⁽³⁾と。

清野勉（きよの・つとむ、1853～1904）は駿河富士郡上野村の生まれ、家は代々医を業としたが、明治元年徳川慶喜が沼津に兵学校をおこすや、ここに入學し、英学などを修めた。沼津兵学校の教授方頭取が西周であるから、とうぜん西に西洋哲学の講義をうけている。のち東京に出て中村正直の門に学び、明治5年ころ海軍兵学校で英語を教授したが、まもなく職を辞し、独学で哲学の研究に従事し、20年哲学館（東洋大学の前身）が創立されるや、教授に招かれ「論理学」を講義し、晩年には大谷大学に哲学を教授した。西、中村のほか、加藤弘之、中江兆民、井上円了、三宅雄二郎、井上哲次郎らとも師友関係があったが、純然たる民間学者である。

かれは韓図純理批判解説において、カントの第一批判中もっとも難解の個所に属する先験的分析論に正面からとりくみ、開拓的な役割をはたしている。ここではその詳細をのべることはできないので、三枝博音が日本に於ける哲学的観念論の發展史（昭和9年）のなかでつぎのように評価していることを、ぜひ紹介しておくことにしたい。

「従来のカント解釈は、シュベェグラールやフィッシャーの哲学史によってゐるのであるが、清野勉に於いて始めてその解説が成立したといふにとどまらず、更に關心なくカントの学説を摂取したといふ点に於いて、その後の、否今日のカント学者の解釈に対して、勃興期の科学の明晰性を保持し、且つその解釈は批判哲学特有のアンタゴニスムを含んでゐる。」

私たちはここにあの西周らによって開拓された、わが国における啓蒙的哲学思想の、明治期最後の一つの結晶を見出すことができるのである。

清野勉のカント研究に関する労作が公刊された明治29年（1896）は、ドイツで新カント派運動の成果の一つとして、雑誌 *Kantsudien* が創刊された年である。新カント派は「金融資本主義イデオロギーの理論的形成者」ともいわれる⁽⁴⁾。清野以後のわが国の哲学、ことに官学における講壇哲学は、この学派に大きな影響をうける。そして、このころから帝国大学においてもカント哲学が精力的に移植されるようになる。たとえば、明治28年の哲学雑誌（104号）は『文科大学概況』として、つぎの記事をつたえている。

「新学年。……尚ほ哲学に関する講座の中注目すべきは、中島（力造）教授は知識論に於てカントの純粹理性批判を会読し、倫理学に於てカントの実踐理性批判を会読し、哲学演習に於て、ケーベル教師は行々はカントの判断力批判を講習する事となる。尚ほ井上（哲次郎）教授はカントの批評を講述すと云ふ。又ケーベル教師の哲学史は2年級に於て方にカントに及べり。本学年はカント学年とも稱すべし。」

かくて明治30年代以降におけるわが国の哲学研究の中心は帝国大学に移り、ケーベルらを中心にドイツ哲学、ことにカント哲学の解釈が代表的な研究課題の一つと

なる。明治20年代までにはたしたような民間学者による哲学の研究は衰退の一途をたどる。同時に明治初期啓蒙哲学思想の成果も、深遠ないし高踏的な講壇哲学のまゝに、幼稚ないし無意義のものとして排斥されるような時代思潮となる。日清・日露両戦争を契機としての国家主義的思想への傾斜、あるいは「独創」へのあせりがそれに拍車をかけたのである。

- (1) 竹越與三郎講述『独逸哲学英華』は、くわしくは「独逸・片利知蒙利須查利昌斯原著、日本・竹越與三郎講述、由井正之進筆記、明治17年12月出版」。主としてチャーリ・ボウスにより、他は参考にとどめたことは凡例に記されている。
- (2) 第4部「批判法の哲学」は、三枝博

音編『日本哲学全書・西洋哲学篇』にも収められている。

(3) 『韓図純理批判解説』の一部は、その解説を付して、前掲『日本哲学全書』に収載されている。

(4) 三枝博音著『日本に於ける哲学的觀念論の発達史』(新版)126ページ参照。

6 おわりに——世界のなかの《日本》研究——

昭和46年5月、『国立国会図書館所蔵・明治期刊行図書目録』の第1巻（哲学・宗教・歴史・地理の部）の出版を記念して、「明治開化の本」展示会が、国立国会図書館講堂において開催された。展示会目録の久保田館長のことばによると、明治期刊行図書目録の作成は、「明治百年を記念し、また当館創立20周年を記念する事業として、去る昭和40年に企画」したとのことである。周到な準備のもとに、数年の歳月をかけて、この有意義な企画を遂行された関係者の方がたに、心からの敬意を表したい。

私事にわたって恐縮であるが、昭和24年のころから恩師三枝博音博士の指導のもとに日本近代製鉄技術発達史——八幡製鉄所の確立過程（昭和32年・東洋経済新報社刊）の編さん・執筆にとりかかり、またそのかわら文学部哲学科の学生として「わが国におけるカント研究発展の前史——西洋哲学思想の形成」と題する卒業論文に取り組んだ私は、昭和25～6年のころ、上野の旧国立図書館に日参し、技術から哲学にわたる明治期の諸文献を渉猟し、何百枚におよぶ原稿を筆写したものである。今日のようにコピー用の便利な機械も設備も皆無であった。だがそれだけに旧時代のあの冊子体の目録を頼りに引き出して、閲覧させて頂いたあれこれの書物が身に沁みてなつかしい。そのなつかしい諸文献が、今回の1,000ページをこえる大冊の明治期刊行図書目録として整理され、またそのころ予想もつかなかった初見の稀覯本とともに、一堂に展示されたのである。

「日本の本の歴史は、永い、立派な伝統を持っていますが、量的、内容的に、爆発的な出版文化の花をひらいたのは明治開化の時代であったのであります。これには、西洋文明との接触ということが触媒として作用しているようです。このささやかな展示会では、その全貌を体系的に文献に拠って説きあかすというようなことは望

めませんが、なるべく珍しい本、世に出なかった本を中心に、いくつかのトピックを考えてみました。」(「明治開化の本」展示会のしおり)——約200点におよぶ明治期の諸文献が、そこでは政治・外交・徴兵令、西洋経済学の移入、博覧会・共進会、勸農、百工、富源、開拓使、西洋哲学等々合計24のタイトルのもとに、陳列構成されたのである。

かつて前記三枝博士は、**西欧化日本の研究**(昭和33年・中央公論社刊)をあらわしたとき、「日本文化はひとつ大きな河のようなものだったといえぬだろうか。同じことは世界諸民族の文化についてもいえるであろう。いずれは世界文化というひろい海にむかって流れているのであるから。」と書いたことがある。そして、世界文化という海の潮に連なっている日本文化の流れに対して、いわば上潮^{あげしお}となって押しよせ、大きな影響をあたえた文化として、「西欧文化」を把えられたのである。

西欧文化の潮がとうとう日本の河にはいつてきた時代、それがほかでもなく明治開化の時期である。展示会につけて、私はこのような世界の海の潮に連なる明治開化期の日本を、あらためて思索することができた。この時代には、ヨーロッパの哲学思想も、科学も技術も、じつは一つのヨーロッパの文化、世界の文化の一環としてうけとめられ、やがて新しい日本が世界のなかの日本として、全人類とともに歩んでゆく、そうした基盤、そうした環境が急速に醸成されつつあったのである。

私はこの**目録**の作成を記念して、明治初期の啓蒙的哲学思想にまず焦点をあて、いったんは哲学するための世界共通の思索の広場に出たその成果が、同じ明治という時代にかんじていかに変容していったか、もし今日なお明治初期啓蒙的哲学思想に学ぶものがあるとすれば、それは何であるか、いったい世界史の大きな流れのなかで「哲学する」とは、いかなる仕事であるのか、そうした問題に対して一つの歴史的反省を試みたいと考え、わが明治期におけるカント哲学の移植史に事例をとって、いささか論述してみたのである。明治期とカントに考察の中心を置いたものの、私たちの問題意識は、つねに世界のなかの《日本》研究にあるのでなくてはならない。⁽¹⁾

(1) 「世界的とは世界の他の国々の哲学に負けないといったような意識からのものではない。世界共通であるかという意味である。日本の哲学が世界の他の国のそれに勝れているかという前に、まず共通であるかが重要なものではあるまいか。」(三枝博音『哲学するための序説』昭和23年)前掲

『発達史』(新版)のあとがきに筆者はこの言葉を付したのである。拙稿における発想の多くは、かかる意味での三枝先生の世界史的方法に負うところが大きいことを、付記しておきたい。

(いいだ・けんいち：新日本製鉄株式会社調査部資料室長・武蔵野美術大学講師)